

映画という表現方法は、我々が考えているよりもずっとプリミティブ（原始的）なものかもしれない。この場合の映画とは、映画館で見る映画のことである。ビデオやDVDを自宅で楽しむ場合はまた別だ。

映画が始まる直前、プザーが鳴って、映画館内が一瞬真っ暗になる。あの時の不安と高揚感は独特である。その場に身をおく集団が闇に包まれる瞬間、無意識の奥底に封印されている最初の感覚が目覚めそうになる。そして一気に展開する光と音の交錯。やはり映画には特有の機能があると思う。

以前、カトリックの総本山であるバチカンが、映画45作品を選んで推薦したことがあった。「ベン・ハー」や「炎のランナー」などが選定されていた。バチカンが注目することからわかるように、映画には宗教や思想のプロパガンダとして活用され、時には体制への批判手段として威力を発揮してきた。これも映画というメディアの魅力がなせるわざである。映画は光と音を駆使した表現

朝日新聞 14(H26).10.28

映画と葬儀



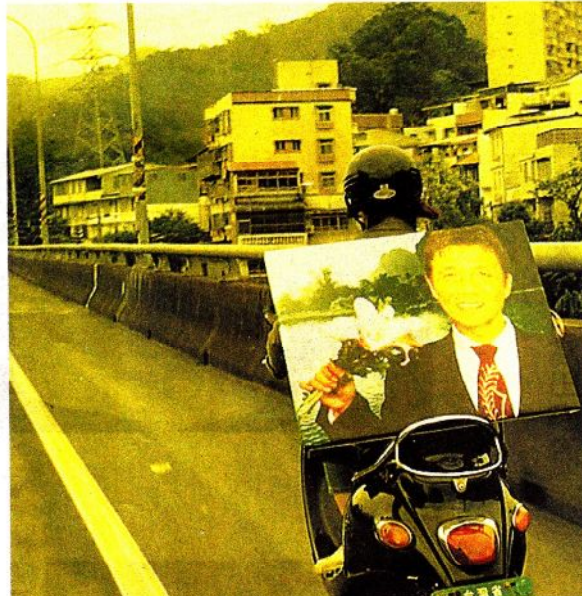
宗徹 积

方法であるが、「暗い閉鎖空間の中で」「集団で」見るところに特性がある。これは遙か古代において、人類が洞窟で営んだ密儀と同様の装置ではないか。映画自体は近代の産物なのだが、光源を使った投影の構図は影絵やうつし絵などと同じ系譜上にある。そして、そのような表現方法の起源は古い。

かつて現生人類は、真っ暗な洞窟の中で明かりを灯しながら、宗教的儀式と芸術的活動を行った。閉鎖的な空間の中で、コミュニケーションのちぎりを結び、心をシンクロさせ、悦楽の時を共有したのである。ゆらゆらと揺れる光の中で変性意識を喚起させ、岩や木を叩いてトランスした。それは、他の生物にはない、「心の自由領域」をもった現生人類ならではの営みであった。映画館で光と音による表現を浴びることは、古代の洞窟で展開された根源的な原風景に軽く触れる行為なのではないか。

認知考古学者のステイブン・ミズンによれば、人類の「心の自由領域」は10万年前から3万年前にかけて確定したそうである。そして、どうもこの時期に人類は死者を埋葬するようになったらしい。現在確認されている最古の埋葬例は約4万年前である。しかも、なんらかの死者儀礼を行った形跡もある。初期の現生人類は、遺体の上に色づけをした土をかけるといった行為をしている。花をたむけた可能性もある。ある種の葬儀

らと揺れる光の中で変性意識を喚起させ、岩や木を叩いてトランスした。それは、他の生物にはない、「心の自由領域」をもった現生人類ならではの営みであった。映画館で光と音による表現を浴びることは、古代の洞窟で展開された根源的な原風景に軽く触れる行為なのではないか。



葬儀をテーマにした台湾映画「父の初七日」の一場面（DVD発売元：マクザム、パルコ、太秦）
©2010 Magnifique Creative Media Production Ltd. Co. ALL rights reserved

暗闇の儀式 私たちの原風景

人類が行うあらゆる儀礼の中で、最も注目すべき営みは葬儀であろう。実は、映画において葬儀の場面が描かれることは少なくない。多くの映画監督が葬儀場面を撮った経験をもっているはずである。

もちろん、葬儀を主題とした映画もある。伊丹十三の「お葬式」を嚆矢として、韓国映画の「祝祭」、台湾映画の「父の初七日」など、いずれもお勧めの映画である。そしてどれもがコミカルな仕立てとなっている。映画で葬儀を描くと、必ずといっていいほど滑稽感が露出するのだ。

誰もが悲しみを抱えながら真摯に死と向き合っており、精いっぱい葬儀を営んでいる。ところがそれをスクリーンに投影するとどこかコミカルなのである。葬儀と映画という組み合わせがそうさせるのだろうか。

死は峻厳で冷徹な事実であると同時に、温かくて懐かしい現象でもある。映画で表現される葬儀を見ていると、そんなことを実感するのである。

（相愛大教授
浄土真宗本願寺派如来寺住職）

月1回掲載します。宗徹宗さんは今回で終わり、次回からは「大阪城天守閣」館長の北川央さんです。